作家

# 川上弘美さん

川上弘美氏は，芥川賞作家であるが，妖精のような雰囲気をもお持ちの方である。その雰囲気につられて著作を読むと，今度は，混沌とした地に根を張ったような強い生命力に魅せられていくことになる。不思議で，こわくて，なつかしい川上ワールドは実に魅力的だ。ちなみに，氏の著作中にあった「セックスの時，女性は脱いだパンツの定位置をもっているか」という論点を，本インタビューではご自身にも語ってもらっていたのだが，この読者へのサービスネタがゲラ段階で削除されたのは残念なのだ。　（聞き手・構成：味岡 康子）

©anan/ 岡本あゆみ

**── 小さいときから本はお好きだったと思うんですけれども，耽溺する質とか量が変わったことはありましたか。**

小学校のとき大きい病気をして入院し，そのとき何もすることがなくて読書をし始めたのがきっかけで，それ以来ずっと同じペースで読んできました。ですから量はあまり変わってないと思います。質に関しては，ハウツー本から，科学の本から，小説から，新書から，新聞も含めていろいろです。活字中毒のところがあって，チラシでもいいから読んでいる感じですね。

**── 硬軟で言うと，硬の方は小説以外の例えば哲学書，思想書，そういうものも読まれるんですか。**

最近の日本の哲学者の本は大好きです。永井均さんや野矢茂樹さんなど，ものを考えるとはどういうことか，思考するとはどういうことか，そういうことをやわらかく書いてある本は大好きでよく読みます。

**── 吉本隆明もお読みになったとか。**

私が学生だった時代は，みんなが読む本は自分も読まないと肩身が狭いという時代。ですから吉本隆明はじめ，メルロ・ポンティやハイデッガーなど，よく分からないのに読んで，途中で眠くなって……（笑）。

**── 軟の方は例えば漫画とか。**

漫画も大好きです。私の書庫は3分の1は漫画。

**── 例えば好きな作家を挙げていただくと。**

白土三平，手塚治虫に始まり，萩尾望都，大島弓子，山岸凉子，つげ義春につげ忠男，いがらしみきおに諸星大二郎，しりあがり寿。あげはじめるときりがありませんね。

**── 作家の中には構成をきっちり決めて書かれる方と，テーマはあるが，あとはある程度，自由に探って流していく方とあると思いますが，川上さんはどちらですか。**

あまり決めない方です。すごく長いときは別ですが，普通の長編，原稿用紙で400～500枚ぐらいだと，

何となくぼんやり決めておいてという感じでしょうか。

**── 400～500枚というと，川上さんの小説では，どの辺ですか。**

『真鶴』は400枚ぐらいだと思います。書いていくと，その書いたことが次の連想を呼んで，自分でも最初は思ってなかったことが書けて，それがまた次の連想を呼んでいくというのが一番うまく書けているときの状態です。

**── 作品名や人物名の片仮名，例えば芥川賞を受賞された『蛇を踏む』の主人公のヒワ子，あの名前，もう抜群にいいですよね。あと『溺レる』とかコマキさん，ツキ子とか，私は異次元性を示しているのかなと思っていたのですが，『センセイの鞄』の後，『真鶴』あたりからは普通の漢字を使って，あまり片仮名名前が出てこない。少なくなってきたのは自然にそうなられたのか，あるいは意図的にそうされたのか。**

片仮名は抽象性が高いからイメージが付きにくく，最初のころはそういうものが書きたいなと思っていました。デビュー作の『神様』では「私」という言葉も出さなかったんですよ。イメージが付くのが不安な気がしたのですが，ずっと書いているうちに，違うこともしてみたいと思い始めて。

**── 『蛇を踏む』の中で，ヘビの化身である女の人が，つくね団子とインゲンを煮たものを作って，帰宅したヒワ子を迎えるというところ，このつくね団子とインゲンの煮物というチョイスがヒワ子とヘビの化身にぴったりだといたく惹かれました。**

ありがとうございます。たぶんそのころよく家で作っていたおかずを書いたんだと思います。

**── その『蛇を踏む』の文庫本の裏表紙に，「若い女性の自立と孤独を描いた」と書いてあり，これはそう読むのかと。**

この本をどう読んでほしいですかという質問がたまにあるんですけれども，もう私の手を離れた後は，小説は私のものではなくて，読んでくださる読者の方のものになると思っています。受験用の問題集に載ったりしたものを送ってくださることがあるんですが，そうすると，「このとき何謀はどういう気持ちだったか」などの設問に答えようとしても自分が答えられなかったりする。だから作者というのは案外あまりものを考えてないかもしれないです（笑）。

**── 日常生活を書かれても，幻想的な世界を書かれても，たとえそこに書かれていなくても水面下にはセックスの存在感が強くにおうように感じられ，川上さんの外見から一見想像できないような，強い生命力を感じます。**

セックスそのものだけでなくて，何か生きているときの動物的なもの，そういうものは普通の人生でも大事にしたいと思っていますので，そういうふうに感じてくださったとしたらすごくうれしいです。

**── 失礼な言い方をすると，すごくしぶとい，簡単にはそんなに動かない固まりのような，そういうものを感じるので。**

わりとしぶといタイプです。たまに，優しそうな人だなどと勘違いされることがあるのですが，全然違います（笑）。

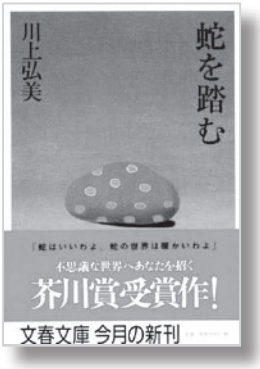
**── 健啖家でいらっしゃる？**

はい。食欲も旺盛で，大食いだし，大酒飲みだし。それから友達をたくさんつくりたいというタイプではないけれど，わりと人恋しく思う。恋愛ということだけじゃなくて，一緒に誰かといると離れたくなくなるようなところはありますね。だからお酒を飲んでいるとき，いつまでも飲みたがって迷惑がられるのですが（笑）。

**── お酒はどのぐらい飲まれるのですか。**

最近少なくなりました。休肝日は週３～４日。でも飲む日はたくさん飲んじゃいます。

## 川上弘美さんの著書




『蛇を踏む』
文春文庫

『溺レる』
文春文庫

『真鶴』
文春文庫

**――お生まれは東京杉並区かと。**

母の実家が本郷で，しばらくそこに住んで，3歳のとき杉並区に移って以来ずっと杉並育ちです。

**――生まれてから一番最初の鮮明な記憶はどんな記憶ですか。**

本郷の家で母が掃除機をかけている横で，母の足にしがみついているという。

**――高齢者の登場人物も印象的なので，祖父母さんと同居しておられたのかなと。**

同居はしてなかったですが，父母両方の祖父母はみんな東京だったので，一緒には住んでいなくともしょっちゅう会っていました。お年を召した方，好きです。

**――高齢者もそうですが，作品には気っぷのいい年配の女性が多く登場してすてきです。『古道具 中野商店』のマサヨさんとか，『これでよろしくて？』のおば様たち。それから『風花』の唐沢知子さん。**

通常，小説の中では年のいった女の人たちは少し不遇なところがありますよね。でも実際には素敵な年配の女性はたくさんいらっしゃる。そういう人たちのことを書きたいなといつも思っています。

**――お父様はどんな方ですか。謹厳実直タイプですか。**

いや，酒飲みです。大学で生物を教えていました。

**――それで生物科にお入りになったんですか。**

私は医学部に行きたいと言ったら，うちは国立の医学部に行くお金しかないと言われて，生物科に入ったけれど，父の知人ばかりが多くてちょっと居づらかったです。でも大学の先生たちって，大学にもよると思いますが，楽しそうでした。父は学生運動のころの教師ですから学生に攻撃される側ではあるけれど，まだ若いから近いところもあって，しょっちゅう学生さんたちがうちに来ていて，みんなでマージャンをしているんですよ。大学の先生ってマージャンをしてお酒を飲むという印象しかなくて。よく遊ぶ人でした。

**――お父様としては川上さんのことは目に入れても痛くないという感じでしたか。**

子供には興味なくて，お酒を飲んで歩くのが好きなので，そういう感じはなかったです。家に，親類のフラフラしているおじさんがいる，という感じでした。

**――お母様は賢夫人タイプ？**

いえ，全然。父と同じで，さばけた人でした。

**――突き抜けたご両親だったんですね。**

そうはいっても，結婚はちゃんとするんですよ，という時代。基本的には保守的だったような気がします。

**――アメリカに住んでいらしたんですよね。**

新刊
『水声』
文藝春秋／2014年9月30日発行

「都」と「陵」はきょうだいとして育った。
いま二人が共有するこの甘美な時間！
ママは死に，その死は現在という時間を強く揺さぶるのだった。

私が幼稚園のとき，父がカリフォルニアへ留学して3年間ほど。

アメリカは大好きで，アメリカの記憶はものすごくたくさんある。日本に帰ってきてからの記憶はぼんやりしていますが，アメリカのことは本当によく覚えている。1年ぐらいは英語を全然しゃべれなかったんですが，それでも何か楽しくて。

**――小さいときの3年間で大好きだったとすると，それは何らかの形で今お書きになっているものに反映されているわけですね。**

たぶんそうですね。

**――そうしたら，日本の小学校に戻ってきて，集団的な組織感覚みたいなものに違和感を持たれましたか。**

自分が違っているということが分かってないので，ものすごくいじめられましたね。それで，5年生のときに私立の女子校，雙葉に，編入試験があったので受験して，そっちに行ったらまた伸び伸びしました。自分ではよく分かってなかったのですが，たぶん思ったことを全部言ってしまうとか，人に対するおもんばかりがないとか，そういうのが今考えると，今もそうなんですけれど，まずいですよね。

**――雙葉はカトリックですが，その影響というのはどこかにおありですか。**

あるかもしれませんね。宗教って面白いなと昔から思っていたので，雙葉にいたとき宗教研究のクラブに入っていました。

**――小学校5年生から高校まで雙葉で，大学も女子大だと，男子と遊ぶような期間はあまりなかったですか。**

4年生までは女の子にいじめられるものですから，男の子としか遊んだことがなかったんですが，いわゆる思春期になってから男子とそうやって日常的に触れ合うことはなかった。女子校育ちはわりと特徴があるんですけれど，やはり女性になる必要がないので女性性が薄い。よくも悪くも（笑）。

**――なるほど，男性の目がないので意識しないで済みますね。**

制限されてないから女の子の意地悪さが案外ないという面もあります。男性の視線を意識したときに必要な複雑さを持たなくて済んだけれども，だからすっとんきょうという感じもあります。

**――実はすごく居心地がいいのよって女子校育ちの方は言いますよね。それで女子大を選ばれたのでしょうか。**

でも大学は，ぜひ男女共学のところに行きたかったんですが，東京の私立では生物科は早稲田ぐらいしかなく，早稲田は落ちてしまいまして。その上，就職も田園調布雙葉の教職だったので，青年期は女子に

しか縁がない感じでしたね。

**── 大学では団塊の世代，学生運動が熱かった頃の10年後だと思いますが，空白感などの空気はありましたか。**

しらけ世代といわれていました。団塊の人たちにしょっちゅうお説教されていて。決まり文句は何だっけな。…主体性がない…。君たちは主体性がないと怒られて。懐かしいです。

**── 最近，涙した映画とか本はありますか。**

涙……しないですね。「泣ける○○」というので見ると，たいがい大笑いしてしまったり……。ひねくれてますねえ（笑）。でも，テレビの「はじめてのおつかい」は，泣きます。

**── 川上さん自身は，やつし願望というのはおありですか。そんなことはない？**

やつし願望？　それはどんな意味で？

**── 上昇じゃなくて下降願望みたいな。**

下降ということは，自分が上にいると思えているということですよね。今は小説が社会的に認められていますけれど，小説を書く人間ってどうもみんなだめなんですよ。ちょっとしばらくやってみて分かりましたけれど，ほとんど全員だめだから（笑）。

**── いいんですか，そんなことを言って（笑）。**

別に人格的に崩壊しているということではないですが，何かどうしてもだめなところがあるんです。自分にももちろん壊れているところがあるので，そういう意味でやつし願望はないです。やつす必要はないというのが実感です。

**── 俳句をしておられますが，俳句を始めたきっかけは？**

最初私がデビューしたパスカル短篇文学新人賞というのは，ネットで応募するもので，その選考委員の1人の小林恭二さんが「ASAHIネット」というところで句会をやっていらしたんです。筒井康隆さんも選考委員だったのですが，筒井さんも参加していらっしゃった。俳句は古くさくてつまらないものと思っていたら，全然そうじゃない。美しい短い詩みたいなものだと知りました。

**── 小説を書くことと俳句を作ることというのはバランスがいいんですか。**

俳句を作っていることが小説に影響していると思います。俳句は言葉が少ないから読者に委ねるもの。それから季語というものがあり，季語の中にはいろいろな背景があって，ひとつの言葉がたくさんのことを表せるということが俳句で分かりました。私の小説が説明的でないのはたぶんそのためだと思う。そんなに説明しなくても，読者の方は自分が思うよりずっと余白とか語句を読んでくださるんだというのが，俳句をやることで信頼できるようになりました。

**── これまでに弁護士と接触したことはあるかということと，弁護士を利用する側として弁護士に望むことを教えていただけますか。**

私自身は，著作権の問題についてと，ストーカー被害について相談しました。思うのは，まず最初の一歩をどうやって踏み出したらいいかというのが難しい。例えば，どこに行ったらいいかとか，料金のしくみも心配で，相談しづらい。そういうことが解決されて，これなら自分でも相談できそう，大丈夫かもと思えたら，みんな喜んで利用すると思う。そこをどうやって広報していくかを是非お願いしたいと思います。

**プロフィール　かわかみ・ひろみ**

作家，俳人。東京都出身。1994年「神様」（中央公論社）でデビューした後，「蛇を踏む」（芥川賞受賞　文芸春秋），「溺レる」（伊藤整文学賞受賞　同），「センセイの鞄」（平凡社），「ニシノユキヒコの恋と冒険」（新潮社），「古道具　中野商店」（同），「真鶴」（文芸春秋），「七夜物語」（朝日新聞出版），「猫を拾いに」（マガジンハウス）など多数の作品を発表。小説のほかにも，評論，随筆，対談集も数多くあり。現在，芥川賞，谷崎潤一郎賞，三島由紀夫賞の選考委員。「ウェブ平凡」にて「東京日記」を連載中（http://webheibon.jp/）。